じつきょう

商業教育資料 No. 111 通巻399号

複式簿記思考の強固性 —あるいは複式簿記シンドローム—

西南学院大学教授
工藤 栄一郎

ルカ・パチョーリは世界をプラスとマイナスに単純化して構成する技法を著した。その技法は、世界を可視化し、数量的に把握し、その結果、世界を理解可能にし、おそらく世界をコントロール可能にさえるものへと変容していった。(Crosby 1997, p. 222)

1 はじめに

「複式簿記はすごい」と、日本の多くの会計人（会計教育者、会計実務家、会計研究者など）は思っているのではないのでしょうか。

ご存じのように、複式簿記の技術がはじめて書物（活版印刷本）で紹介されたのはいまから500年以上も前のルネサンス期のイタリアの商業都市でのことです。そこでは、当時は貴重で高価な紙を使って、商人たちが行った経済的な出来事や契約を証拠として保存し、必要があればそれらをもとに情報として利用するための技術として、合理的な記録様式や集計や計算の仕組みが工夫されてきたのです。

コンピュータの力を借りることで記録の容量が実質的に無限でしかも安価に確保でき、膨大なデータを瞬時にして適切な様式で出力できるようになったこんにちでも、複式簿記は依然として重宝され続けています。現代のテクノロジーは、現実に生起する複雑な現象を複雑なまま記録しデータ貯蔵し、そして望まれるさまざまな様式で出力することを可能にしているのではないのでしょうか。それに対して、複式簿記はとてもシンプルな機構からできています。言い換えるなら、ひょっとすると現代においては500年も前に生まれたシンプルな複式簿記の技術に拘束される必要はないのかもしれないのです。

しかしながら、冒頭にも書いたように、私たち会計人はいまでもなお、複式簿記をすばらしいものだと信じて疑いません（誤解がないように弁解しますが、私自身も複式簿記に深い愛情を持っています）。この小文では、私たち会計人がなぜ複式簿記を大事に思っているのか、その理由のひとつとして私個人が考えていることをご紹介します、複

も く じ

複式簿記思考の強固性	1
新学習指導要領と求められる授業改善	6
「ビジネス・マネジメント」の授業展開例	8
「商品開発」の授業展開例	12
本校ビジネス流通科 CSV (Creating Shared Value) プロジェクトについて	16

文部科学省指定 SPH の取組	
兵庫県立神戸商業高等学校	20
滋賀県立八幡商業高等学校	24
名古屋市立名古屋商業高等学校	28
お知らせ	32

式簿記が21世紀の現在において、ますますその存在感を増していることを指摘したいと思います。

2 複式簿記に対する賛辞とその背景

会計人にとってはよく知られていることですが、歴史上の偉人たちが複式簿記に言及しています。例えば、次のような叙述があります。

複式簿記が商人にあたえてくれる利益は計り知れないほどだ。人間の精神が産んだ最高の発明の一つだね（ゲーテ 山浦章甫訳『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代（上）』岩波文庫2000年）。

複式簿記の原理はユークリッドの比の原理と双壁をなす絶対完全原理である。それが極端にシンプルなものであるので、深い関心を向けられないのかもしれない（Arthur Cayley: *The Principles of Book-keeping by Double Entry*, Cambridge at the University Press, 1894）。

資本主義の発達に対する複式簿記の意義はいくら強調しても強調し過ぎることはない。当時の教科書は、簿記を「人間精神の発明した最も美しきものの一つ」と書いているが、たしかに複式簿記はガリレイやニュートンの体系と同じ精神から生まれたのである（木村元一『ゾムバルト近代資本主義』春秋社1950年）。

ここで私が注意を向けたいのは、こういった偉人らが複式簿記の意義について言及していますよという事実ではなく、これらの言説を、会計人（とくに会計研究者と会計教育者）たちが自分の論文や著書のなかで繰り返し引用し記述しているということです。古いものとしては、ドイツのヨハン・フリードリヒ・シェアーやアメリカのヘンリー・ランド・ハットフィールドなど近代会計の基礎を築いた会計の巨人らが、これら偉人たちの言説を紹介しました。ちなみに、この二人は大西洋を隔てた離れたところにいましたが、学問的交流がありました。ヨーロッパとアメリカの会計学

のパイオニアたちは同じ問題と似たような境遇を有していました。

彼らが偉人たちの言葉を借りて複式簿記の意義を強調したのには、少し悲しい物語があったのです。例えば、ハットフィールドはアメリカではじめて会計学を担当する正規の大学教員となったのですが、当時のアメリカでは、会計学は大学で教えるような価値のある科目ではないという風潮が強くなり、そういった雰囲気打破しようとして、複式簿記は長い歴史を有している人類が生み出した技術であり、会計とは直接関係のない偉人たちが複式簿記に言及した言説を紹介するなどして、複式簿記に権威を与えようと懸命な努力をしたのではないかと思うのです。

でもまだ「会計学など学問ではない」という雰囲気は完全に解消されてはいないかもしれません。それは現代の日本においてもみられます。30年ほど前のことですが、私のはじめて大学に職を得たのは経済学部という部署でした。人文社会科学のなかでは、経済学は科学性の高い洗練された学問分野だと認知されており、高等教育のなかでは揺るぎない地位を有していました。職場の先輩教授たちの感覚としては、「経済原論」を筆頭とした学科目の序列が確固として形成されていて、会計関連の科目は下の方に位置づけられていたように感じるものが少なくありませんでした。

このような逆風を受けていた会計研究者・会計教育者たちは、自分たちの対象がたいへん意義あるものであることを強調することで、その価値を認知してもらう必要があったのだと思います。

ここで私が主張したいのは、複式簿記を賛美する言説が長年にわたって繰り返し紹介されることで、会計人たちがその賛辞を無批判に受け入れ、複式簿記の価値あるいは限界を自分たちで冷静に検証することをせず、あたかも生まれたばかりのヒナが最初にみたものを親鳥と信じる「刷り込み」現象として思い込んでいるのではないかと、自省しなければいけないのではないかとということです。

世界は、まさに、「複式簿記によるまなざし」によって形成され続けています。ここでは、複式

簿記が人々にあるいは社会に対してどのように世界を認識させてきたのかについて言及し、そして現在、より深くそしてより広く複式簿記が社会に浸透しつつあることを指摘していきます。

3 複式簿記の本質と複式簿記による制約

(1) 複式簿記の本質を規定する要素

複式簿記の本質あるいはその基本構造をどのように理解するかについては、数多くの説明理論を提示した研究が蓄積されてきています。しかしながら、このように多様な理論が存在しても、複式簿記には共通する基礎である「複式記入」の論理があります。

ご存じのように、複式記入とは、ひとつの取引の結果を、ある勘定の借方と別の勘定の貸方とに二重に分類して貨幣数値で表現された価値でもってそれぞれ記録することです。複式記入をどのように説明するかについても、じつはいろいろなものがあります。この冊子「じっきょう商業教育資料」の読者の多くは教壇に立たれている先生と思いますが、みなさんはどのように理解し、そして教えておられますか？

歴史的には（私はいちおう会計史研究者として学会では認知されているようですので、こういった説明が多くなります）、「受け渡し説」、「取引要素説」、それに「因果的複式簿記」などとして展開されてきました。「受け渡し説」というのは、16世紀からの古い時代ヨーロッパで出版された多くの簿記書で広く採用されたもので「受け取ったものは借方に・渡したものは貸方に記入する」というものです。多くの取引は、経済学でいうところの「交換」ですので、たいていの経済事象はこれで説明ができます。「取引要素説」は、現在の高校教科書でも紹介されているいわゆる「取引の8要素」として図式化されているものです。明治の終わりから昭和初期にかけての日本の簿記研究者の系譜（下野直太郎－吉田良三－沼田嘉穂）のなかで形成されたものです。「因果的複式簿記」というのは、アメリカ会計学会長もつとめられた世界的な会計学者で先年亡くなった井尻雄士

教授の簿記理論（井尻 1968）の特徴を構成するものです。

これら複式記入を説明しようとする理論は、いずれも、借方と貸方とのあいだに何らかの関連性を見出そうとしています。ここに複式簿記の本質の一端を見出すことができるように思います。それは複式記入という厳格に貫徹されている「ルール」です。そして「ルール」は絶大な力を有します。したがって、取引によっては、必ずしも借方と貸方とのあいだに関連性が見出されないようなものであっても、会計処理を行うにあたって、すべての会計人は貸借二重分類という形式を維持しようと懸命になります。複式記入の形式を最優先し、その型にあらゆる物事を適合させるようにするといった閉鎖的な思考性は、マックス・ウェーバーのいう「鉄の檻」にたとえてもいいかもしれません。

(2) 思考を制約する複式簿記

また、複式記入は、経済活動や事象のなかに含まれている情報の多様な属性を意図的に排除しているかもしれません。もともと、中世のイタリア商人が行った複式簿記による勘定記録は、文章による詳細な記述によってなされていました。それが徐々に、取引が行われた日付と貨幣金額、それに相手勘定だけの記録へと進展していったのです（例えば（工藤 2015）を参照してください）。こういった記録の形式化・標準化は、情報処理の洗練化・合理化といってもいいのかもしれませんが、現在の複式簿記の様式においては、主要簿に限ってですが、貨幣数値で表現された価値情報だけが記録され、物量やその他の多様な情報は省略される場合も少なくありません。

この点に関して、いくつもの指摘があります。例えば、「会計は主として価値を有する経済的事実を対象として取り扱っている。したがって、非常に多くの要素がはじめから排除されているかもしれない」（Paton 1922）であるとか、「アカウントにとって関心のあるデータは、出来事や現象を記録した膨大に蓄積されたもののうちのほん

の一部分であるかもしれない」(Goldberg 2001) といったものです。なかでも決定的なのは、「複式簿記のほんとうの重要性はその構造の美しさにあるのではなく、その構造が財産変動における原因結果の関係を追求するようわれわれに強制しわれわれのものの考え方に影響を及ぼすという点にある」(井尻 1968) という指摘です。

そう、複式簿記はたんなる記録計算の技術ではなく、私たちのものの考え方や見方を拘束するという想像を超えるすごい力を有したもののなのです。

4 情報技術の発達と複式簿記の強固性

テクノロジーの発達は、経済活動に関する高度で複雑な情報の出入力とその処理・加工を可能にしてくれました。でもはたして、複式簿記による伝統的な会計情報を超えるものを社会は求めているのでしょうか。

「テクノロジーが社会を変えるわけではない。社会のニーズがテクノロジーを誕生させるのである」(Kurlansky 2016) という言説に出会って、私は目からウロコが落ちる思いをしたことがあります。革新的な技術が生まれたことで社会が変わるといのが、私を含めた一般的な理解ではないかと思いますが、この考え方で貫かれた著書には強い説得力がありました。必要なところにしか、技術の革新は生じないものなんですね。

実務における会計処理手続きは電子化されてずいぶん長い時間が経過しています。帳簿記入を手書きで行うことは少数派となり、小規模の事業所でさえパソコンの会計ソフトを使っているところが多いのではないのでしょうか。現在ではこのように電子化された会計情報処理システムが一般的になっていると思われるのですが、じつのところ、それらは依然として、取引の貸借二重分類記入や、損益計算書と貸借対照表という連携した2つの主要な財務諸表を出力するといった、複式簿記の「外形性」を保持しようとしています。外形性を保持しようとするのは本質の保持であると私は考えます。つまり、複式簿記によって思考が制約を受けているのです。

コンピュータ、インターネット、ビッグデータ、それに人工知能という新しいテクノロジー環境においてもなお、社会は、人類が数百年かけて紡いできた複式簿記によって構築される世界を持続させたがっているのではないのでしょうか。つまり複式簿記によって枠づけられた思考様式のなかに、社会はそして私たちは依然として浸っているのです。

5 浸潤する複式簿記シンドローム

情報技術が進展しても、複式簿記は捨て去られるどころか、その適用範囲を拡張し続けています。

もともと商人の記録計算手段であったはずの複式簿記は、その本質を歪めることなく、巨大組織の管理統制の手段へと展開していったことはある意味において自然です。複式簿記は「利益計算」という共通の主要目的を有する主体にとっては使い勝手のいい手段だったわけです。

しかし、近年においては、非営利組織の会計記録の手段として複式簿記の採用が社会的制度として促進されるようになってきました。最初期の事例としては、1971年に「学校法人会計基準」において複式簿記の採用が規定されましたが、21世紀になってから、2003年の「国立大学法人会計基準」にはじまり、2010年の「NPO法人会計基準」、それに2011年の「社会福祉法人会計基準」と組織の制度変化にあわせて複式簿記の採用が加速しています。

最近の事例では、2015年の総務省による「統一的な基準による地方公会計マニュアル」があげられます。それは自治体の会計の変革を促進しようとするものです。そこにおける複式簿記の採用に関連した記述をいくつか拾い上げてみましょう。

- ・複式簿記では、ストック情報（資産・負債）の総体の一覧の把握が可能となります。
- ・また、複式簿記では、上記記帳〔(借)車両100万／(貸)現金100万〕と同時に、固定資産台帳に車が1台増加したことを記録します。これまでも公有財産台帳等において現物管理してきたと思いますが、固定資産台帳で

は「いくらで買ったか」という金額情報もあわせて記録することになります。

- ・会計年度末で・・・貸借対照表を作成すると、対象項目の貸借対照表の残高と固定資産台帳の残高が一致するはずであり、互いを照合することで、どちらかの間違いが発見されるといった検証機能の効果も期待されます。

総務省の「マニュアル」によると、複式簿記を導入することの意義について、上記のように、①ストック情報の把握、②固定資産台帳、③検証機能、などをあげていますが、これらの機能は複式簿記を採用することではじめて得られるものなのでしょうか。私は疑問を持たざるを得ません。つまり、自治体の経営や管理、あるいは運営の目的に適合するために、複式簿記が最適な記録計算システムと理解されたうえでの採用なのだろうかという疑問です。

「マニュアル」はさらに次のように述べています。すなわち、「会計処理方法として複式簿記・発生主義会計を採用し、一般会計等の歳入歳出データから複式仕訳を作成することにより、現金取引（歳入・歳出）のみならず、すべてのフロー情報（期中の収益・費用及び純資産の内部構成の変動）及びストック情報（資産・負債・純資産の期末残高）を網羅的かつ誘導的に記録・表示すること」と。

このことからわかるように、総務省の「マニュアル」は「財務書類」を作成するための手段として複式簿記の採用を決定したのです。地方自治体という組織は、そもそも、その責務（「ミッション」と表現されますね）をよりよく果たすために、複式簿記によって記録されたデータによって「財務書類」を作成する必要があるのでしょうか。

歴史的にふりかえれば、複式簿記を基礎とした会計実践は、その生成以降、社会にとってはある種の成功体験であると言えるかもしれません。このような成功体験を背景にすることで、営利企業とは異なる目的を有するはずの政府組織においても複式簿記を採用することが社会的に正統性を獲

得することに繋がるのかもしれませんが、しかし、複式簿記を採用することが組織運営を成功させるかどうかは別の問題なのではないでしょうか。むしろ、複式簿記を採用することの正統性を社会的に獲得してしまったことで、例えば複式簿記から単式簿記へ戻すといった、制度の修正が、その後において困難になることのほうが危惧されます。

6 おわりに

複式簿記は、長い時間をかけて、商人社会に深く根をはってきました。複式簿記は、会計人たちによって形成され共有されてきた信念にもとづいた強固性を有しています。その強固性は広く社会的なものとなり、少なくとも私の予想しなかった対象にまでその適用範囲を拓けています。

「複式簿記はスゴい」ものであることに私も疑いを持ちません。でも、複式簿記を無批判に受け入れることは危険だと思っています。小文の副題に「複式簿記シンドローム」という表現を使いました。無批判な受容は社会的規模でのある種の症候群（シンドローム）に陥りかねません。複式簿記の技術的特性だけではなく、歴史的な展開過程のなかでその意義と特性を理解し、複式簿記がもたらす社会的な帰結をも考慮する必要があるのではないかと思うのです。

【主要参考文献】

- 井尻雄士（1968）『会計測定的基础—数学的・経済学的・行動学的探求—』東洋経済新報社。
- 工藤栄一郎（2015）『会計記録の研究』中央経済社。
- 総務省（2015）『統一的な基準による地方公会計マニュアル』。
- Crosby, A. W. (1997) *The Measure of Reality: Quantification and Western Society, 1250-1600*, Cambridge University Press. 小沢千重子訳（2003）『数量化革命』紀伊國屋書店。
- Goldberg, L. (2001) *A Journey into Accounting Thought*, Routledge. 工藤栄一郎訳（2005）『ゴールドバーグの会計思想』中央経済社。
- Kurlansky, M (2016) *Paper: Paging through History*, W W Norton & Co Inc. 川副智子訳（2016）『紙の世界史—歴史に突き動かされた技術—』徳間書店。
- Paton, W. A. (1922) *Accounting Theory: With Special Reference to the Corporate Enterprise*, Ronald Press.